

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成30年11月 第213号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

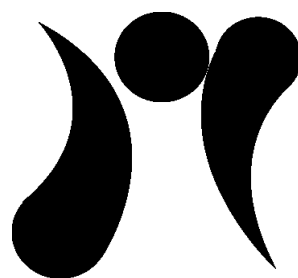
ベストを尽くしてバトンタッチを

インドネシアで開催された今年の第18回アジア競技大会は、日本選手が多くの競技で大活躍をしました。中でも、陸上競技の男子4×100mリレーでの優勝は圧巻でした。世界では100mを9秒台で走る選手が大勢いる中で、日本では桐生選手が一度記録したのみですが、『滑らかなバトンタッチ』を磨くことで、過去のオリンピックでも銅メダル・銀メダルに輝き、次の東京大会では金メダルの期待も掛かります。「アンダーハンドパス」というパスワークを磨いて、磨いて、あのボルト選手を初め世界最速のアスリート達と互角に戦っています。一人ひとりの走力では必ずしも抜きん出てはいなくとも、4人の合計タイムでは優勝も夢ではないレベルに到達しています。選手とスタッフ・陸上競技界全体の『着眼と努力・研鑽』の結果であり、『ベストを尽くす』という『スポーツの醍醐味』が感じ取れ、爽快感が溢れます。

『バトンタッチ』は社会を構成して生きる人間が、次世代に社会を引継ぎ、歴史を続ける上で最も重要な営みです。『限りある命』を生きる人と人が、社会を構成する上で必要とされる『思想や人間性・社会性』を養い、文化・文明を築き、連綿と其れを引継いで来たからこそ、今の世界は2千年～数千年程の歴史が続いています。古来、人は『スポーツ』を行う中で人生に擬した共感や教訓を感じ取り、生活の中に、教育の中に取り入れて、大きな成果を上げて来ました。遺伝子を超え、『命の限り』を超えて、人から人へのバトンタッチを成立させるのは、動物の中で『人間のみ』が行う優れた営みであり、「群」を「社会」へと発展させた『原点』だと思えます。

しかし最近、スポーツ界がパワハラで揺れています。アメリカンフットボールやレスリング・ボクシング・体操、等々で『指導者と選手と組織』が混乱状態です。『ベストを尽くす』スポーツの爽やかさ以前の、スポーツ界にはびこる「体質的な悪弊」が噴出した様に思えます。今年のサッカーワールドカップ・ロシア大会で、日本チームは予選リーグ最終戦で、決勝リーグ残留を優先して勝負を捨て、最後の10分程をパス回しで

(次ページに続く)



(前ページの続き)

時間を消費しました。国内では多数が監督の作戦を称えましたが、一方でベストプレーを求めず、目先の結果を優先する『利口な駆け引き』に対して、批判も世界的に多く寄せられました。その時思い出したのが『松井の5打席連続敬遠』でした。26年前の甲子園で行われた『ベストプレー』よりも『目先の結果を優先する作戦』が今もスポーツ界の主流であり、「目先の結果」を出す指導者への評価が依然として高い事に驚きました。そしてこれは『日本全体の体質』で、日本社会は『愚鈍に正直にベストを尽くす』姿勢を忘れたのかも知れない、と感じました。

9月15日、俳優・樹木希林さんが75才で亡くなりました。十数年前に乳がんを患い、この数年は全身にがん細胞が広がる身で映画に出演し、企画・演出もされ、最期は自宅で家族や知人に身を委ねて息を引き取られた様子が伝えられます。先日、最後の1年間を密着取材した映像がNHKで放映されました。全身のがん細胞と付き合いながら、遠からず訪れる『死を覚悟』しながら、今にベストを尽くして淡々と我が道を生きる姿が潔く爽やかでした。30日に行われた葬儀で、娘婿の本木雅弘さんは『『自然に朽ちていきたい。終末に向かって普通でいて』と言われた』と報道陣に話されています。『見事なバトンタッチ』に感嘆を覚え、敬意を捧げます。

2005年6月、米国アップル社のスティーブ・ジョブズ氏はスタンフォード大学の卒業生に向けた講演で『死』について語りました。『もうすぐ死ぬかもしれないという思いは、人生で大きな選択をするときに、自分にとっての最も大切なツールになりました。死を前にすれば、周囲の期待やすべてのプライド、失敗への恐れなどどこかに消し飛んでしまいます。そして残るのは、本当に大切なことだけです。心に従わない理由などありません。』『誰も死にたくはありません。けれども、死こそは、生きとし生けるものにとって最良の発明であるといえます。死こそが古き者を排除し、新しき存在に道を与えてくれる変革者だからです。今は新しき者たちであるあなた方も、いつかは古き存在になり、取り除かれます。ドラマチックかもしれませんが、それが真実なのです。』そして自らが座右の銘とする言葉を卒業生に贈って講演を締め括りました。『ハングリーであれ、利口者にはなるな。』

氏は、2003年に膵臓ガンと診断され余命宣告を受けますがその後、治療可能とされて上記の講演を行っています。しかし、手術や各種治療の効果も薄く2011年10月、56才で亡くなりました。i p a dやi p o h n eの開発・販売戦略における重要な意思決定は、まさしく氏が講演の通りに行ったのだろう、と推測されます。『敬意と感謝』に尽きます。

『人生100年・超長寿・超高齢』の日本社会は今、『超少子』に直面しています。世代を超えてつなぐ『バトンタッチ』が、この40年で上手く行えない社会に成ってしまった様です。『古き者』が手渡すバトンを落としたのか？それとも『新しき者』が受け取るバトンを見失ったのか？

平均して10年程もある『要介護期間』は、バトンタッチの『助走ゾーン』として、古き者と新しき者がお互いに大事に大切に過ごす貴重な時間です。

『自然に朽ちる古き者』と、『ハングリーな新しき者』が、愚鈍に正直にベストを尽くして、タイミングを合わせて欲しいと願います。

介護についてみんなで語ろう会【平成30年9月28日】

「母の介護を通して“今”思うこと、考えること」

介護相談室 新田 悦子

今回の介護についてみんなで語ろう会は、10年前に胃ろうを造設されたお母さまの介護を現在もされているTさんにお越しいただきました。胃ろうを造設されるまでの経緯と、介護を通して感じていること、今後への思いを話していただき、参加者で意見交換を行い、その後せいりょう園の取り組みなど紹介させていただきました。

胃ろうとは、何らかの理由で口から物が食べられなくなった人のお腹と胃に穴を開けチューブを通し直接胃に栄養剤を注入する人工の栄養補給方法です。

Tさんのお母さまは、腎不全・高度の脱水と栄養失調、左足壊死で膝上から切断という状況となり、胃ろうの造設をするかしないかという選択を迫られた時、「胃ろうは一時的な造設で口から食べられるようになったら外せる」と思い決断されました。その後実際に口から食べられるようになったものの「また使えるよ」と言われ外さずにいたことで、状態が変わった時には胃ろうからの注入をされました。再開された後「胃ろうって厄介だわ」と思い始めたそうです。表情などからお母さまが生きているという実感を感じながらも“厄介”と感じる理由は「胃ろうを選択していなければ自然な終末期を迎えられたのではないか、今のままで母が死ぬ準備ができるのか、それはいつなのか、これからどうなっていくのだろうと思う」ということでした。

胃ろうをしていると、意思とは関係なく決まった時間に栄養が注入されます。健康な若い人でも体調が悪ければ食欲が落ちることがあるのに、胃ろうの人は体調が悪くても一定量注入されているのが一般的です。人の身体は老いて衰えてくると自然と食事も少なくなり、生きていく上で必要な分だけ口にするようになり、自然と食事が食べられなくなった時は「身体が亡くなる準備を始めているというサイン」と言われています。それを知っているTさんは日々お母さまの介護を通して、揺れ動いておられるんだと聞きとれました。

参加者の中には「薄情と思われるかもしれないが、自分もしてほしくないで家族に延命は考えていない」や「そこその年齢になったら無駄な抵抗はしない方がいい」という意見が出たり、「誤嚥性肺炎を繰り返すうちに食欲がなくなっていく姿を見て葛藤している」「医師に胃ろうを薦められ、胃ろうの手術ができる病院に移ったら『胃ろうしない方がいい』と言われて点滴をした」という経験談を話してくださる方もいて、胃ろうについてそれぞれが考える時間となりました。

せいりょう園には現在も胃ろうを造設されている方がいらっしゃいますが、穴の横から栄養剤が溢れてきたりします。痰が増えて溺れているような状況になったり、浮腫・下痢を繰り返されたりすると、その方の表情などから感情を読み取り、家族の意向を確認した上で主治医に相談し状態に合わせた栄養剤の量や方法を変更して、少しでも楽に過ごし、できるだけ自然な看取りができるような取り組みをしています。

胃ろうや点滴などによる水分補給、人工呼吸器などの延命治療をするかしないかの選択を本人か家族が判断しないといけなくなった時、最善の選択をしたいと誰もが望むと思います。その選択の先、数日、数カ月後、数年後かはわかりませんが必ず「死」があり、避けて通ることはできません。Tさんの話を通じて、「死」といかに向き合うのか、そしてその先に「死」に向かって生きる姿を通して「生きる」ということを考え、感じるその過程が大切であると感じました。





ランナーを出迎えるゲート

今年のRUN伴に参加する目標を「認知症の方も社会人であり、地域の一員である」ということを発信していく、としました。RUN伴という名称自体を知らない方にも興味を持って参加してもらうために、「RUN伴 地域みんなの絆（たすき）で繋がろう」と委員会で考えたキャッチコピーを大きな看板にして園内数か所に掲示しました。

RUN伴の日程が近づいてくると、利用者の方々に応援用の旗を作成していただきました。また当日カフェで焼き芋にして提供するさつま芋を加古川認知症の人と家族サポーターの会「元気会」の畑からご提供いただき、利用者の方と職員が一緒になってさつま芋の泥落としをしました。さつま芋の泥を洗っている際にはみんなで水の入った桶や芋入れの籠を囲み、「しゃがんでると腰が痛くなるわ」「籠を椅子にしましょ」「泥や根っこが綺麗に取れてないわ」などと利用者も職員も関係なく、和気藹々と作業しました。利用者の方は作業の途中で「ちょっと私はあれをしなきゃ」と立ち去られましたが、職員は「そら、この中腰作業はしんどいわな」と笑いながら見送りました。他にも、利用者の方が自主的に園内の草引きをして花壇を整えてくださり、みんなで一緒になってRUN伴の準備ができました。RUN伴当日の早朝準備も、利用者の方がお手伝いに来てくださいました。蒸したさつま芋をアルミホイルで包む作業をいただいていると「これは当たりで、当たった人は嬉しいわよ」と言いながらさつま芋2切れと一緒に包んでおられ、お茶目な一面を見せてくださいました。その方は普段から他の利用者の方が楽しく快適に過ごせるように気を配る方でしたので、みんなを楽しませようと「さつま芋くじ」を作成されたのだと思います。この方に限らず他の利用者の方も、認知症になられてからもこれまでの人生で培ってこられた「その人らしさ（例えば、生活の送り方や他者への気遣い方、生活の中での着眼点や気づきの感覚など）」はずっと持ち続けて、ふとした瞬間にそれを発揮しながら生きていらっしゃる姿を見せてくださいます。

カフェが始まると、元気会の方と兵庫大学の学生さんがお茶を入れたり焼き芋を配ったりしてくださいました。最初はできるだけ利用者の方と交流してもらいたいと考えていましたが、こちらから特別に声をかけるまでもなく、カフェの飲み物を何にするか聞いて提供していく中で何気ない交流ができている様子を見ることができました。その様子を見て、こちらから「交流してください」と声をかけるのもおかしな話だと気づきました。認知症の方と自ら話してみても何かを感じ取ってもらうことが、認知症の方もそうでない方もみんなが地域の一員であると感じてきかけになるのかなと思いました。また、認知症になってもその方々で症状は違います。認知症とはこのようなものですよ、と先に伝えるのではなく自らの触れ合いの中で感じ取ってもらうように進めていけたらいいのではないかと、とも思いました。



カフェの様子

他施設からせいりょう園へ絆（たすき）を繋いでくれたランナーをカフェ会場のみんなでお迎えし、またお見送りをした後のことです。みなさんでカフェを楽しんでいただいている中で、嬉しいことがありました。地域住民の方がお子さんを連れてカフェに参加してくださったのです。住んでいる地域に施設があることを知らない方や必要性ができたときにのみ足を運ぶ方が多い中で、イベントを知って気軽に施設内に来て下さった。施設は身近な存在で、そこに住む方も地域の一員だと感じていただけたのではないかと思います、少しずつでも前進できているよう

に感じられて嬉しかったです。

普段の生活の中で、認知症になられていても利用者それぞれの「自分らしさ」を垣間見ることが出来ます。介護施設で働く職員が一番そのことを理解しています。今後も外部と交流しながら行うイベントを利用し、積極的に認知症について発信して地域の方に知ってもらいたいと思います。

ユニット型特養 介護福祉士 伊藤 勇介

10月13日にRUN伴の東播磨ブロックをランナーが走り、無事に次のブロックに襷をつなぐ事ができました。

今年のRUN伴には打ち合わせの段階から参加してきました。当日までに、RUN伴を知ってもらう為の啓発活動として、ポスターやチラシを貼る、ポスターやチラシを配る、ネット新聞に記事を掲載、BAN-BANラジオの番組で告知をするなど、幅広く活動しました。

当日は、スタート地点の明石の特別養護老人ホームパーマムーンから最終のゴールのデイサービスセンターニッケつとまで、自転車でランナーの伴走を行いながら各中継地点で写真撮影をしました。道中、「なんで走っているんですか」と聞かれる事もあり、その度に趣旨を説明しました。「頑張ってるね」と温かい声援を頂く場面もありました。

その中で一番印象に残っている事は、中継地点になっている各施設に立ち寄った際に、その利用者の方々が笑顔でランナーを迎え、送り出してくれた事です。どの施設の方も応援の旗を手作りしてくれていたり、ランナーの体調などを気遣ったり応援してくれる姿勢を見て、改めて認知症の方と私たちは何ら変わりのない同じ地域に住む一員だと思いました。

ひとつ心残りの事が、その姿を見たり感じたりできたのは、ほとんどが普段から認知症の方々と携わる機会の多い人達だったという事です。「この応援している姿を地域の方に見てもらう事が一番の啓発活動になるんじゃないかな」と感じました。

今回のRUN伴では、加古川駅で私が参加させて頂いた2016年の時より遥かに多い数の人達が協力して下さい、ベルデモール商店街を行進したり、駅前で歌を歌うなど、RUN伴の輪はたくさんの方々に支えられて、確実に広がっていると感じる事ができました。普段認知症の方と関わっている私たちが今後もこのような活動を継続し、「認知症の方も同じ地域の一員」という事を知ってもらう橋渡し役になれるように頑張っていきたいと思います。



利用者の方とRUN伴委員

【せいりょう園特養待機者状況（平成30年11月15日現在）】

○入所判定済み者 163人

【内訳】要介護1：22名 要介護2：24名 要介護3：43名

要介護4：40名 要介護5：34名

【希望する特養】地域密着型特養のみ 98名 ユニット型特養のみ 13名

両方 52名



特養入所条件については、県の「入所判定マニュアルに」基づき、要介護度3以上の方が対象となります。待機中の方で介護度変更した方、要介護度1・2であるが、在宅での生活が困難な方には、相談を受け付けています。

お急ぎの方は、お手数ではございますが、近況をお知らせ下さい。



11月に入って秋の気配が濃くなり、紅葉便りを耳にするようになりました。本日の仏教講話は南宗寺の月嶺 教史ご住職です。

「皆さんこんにちは。西神吉町^{かほえ}鼎から参りました。私の家の辺は狸が出てきます。志方の方は猪が出たりします。アライグマも出ますね。食べ物を求めて野生動物が出てくるようになりました。」と冒頭に挨拶されて、お話に入られました。

「皆さん、長生きしたいですか？長生きの秘訣、気をつけている事はありますか？テレビを見ていますと、AI(人工知能)で長生きの秘訣を出していました。コンピューターに入力して『読書』と出てきました。運動や規則正しい生活をする事も大切ですが、頭の活性化も大事だと思います。余裕があったら本を読んだり、新聞を見られたら良いと思います。

今日は毎日新聞に仲畑流万能川柳というコーナーがあり、それをピックアップしてみました。」

可愛さは 片手で年が 言えるうち

あの世から すべて見てたら 困るなあ

自分の生活を仏様に見られて、恥じるような生活はしていませんか？

ヨチヨチが スタスタになり ヨタヨタに

一生を端的に表していますね。

下り坂 なのに人生 楽でない

年を重ねていくという事は、しんどいですね。

病名に 老人性が ついてきた

老人性とは治りませんという意味らしいです。

死ぬまでに 答えたい 生きる意味

考えた事がありますか？答えが出ませんね。

誕生後 一步踏み出す 死出の旅

私達は、生まれたという事はいつか死ぬという事を背負っているのですね。

生んだ鷹 遠くへ飛んで 一人住む

孫生まれ 我らも共に 生まれたり

孫が生まれたという事は私達がおじいちゃん・おばあちゃんになった。孫の存在が私達をおじいちゃん・おばあちゃんにしてくれたのであり、他者との関係性の中で私達の存在があるんです。一人ではない。嬉しいと同時に有り難くもあり、寂しくもあり、いろんな気持ちが入っています。

偶然が 度重なって ここに孫

何回も偶然が重なって孫が出来た。すごいご縁の積み重ねで、気がつけば命を頂いていました。命って自分のものではないんですよ。

親の年 超えても 惑うことばかり

人生は選択の連続です。親の年を越えると目標達成で全て分かった気になりますがそうはいきません。

実物は 見たことがない 俺の顔

自分の顔の外見は鏡で見ても、本当の自分の顔は鏡で見る顔とは違います。人には見せないですね。本当の顔は、心の鏡、仏様に手を合わせる時に見えるのではない

でしょうか。

青春は 人恋う頃と思えども 八十路過ぎて 恋うは変わらば
年を重ねるといふ事は経験しないと分からないですね。

人生で もっとも大きく書かれたる 君の名を見る 斎場入り口

長年苦楽を共にされたお身内を亡くされた時に詠んでおられるのでしょうか。

悲しみばかり思って詠んでおられないような気がします。命のバトンを受ける覚悟を感じませんか。亡くなられた方に敬意を表し、身をもってお示し下さった命を相続していく事が大切だと思います。仏教的には亡くなればお終いではありません。そういう側面から見ると“死”にも意味があり、それを受け継いで大事な儀式であったお葬式も名実ともに変化してしまったのかも知れません。

我が国と いきりまっなよ 我が星だ

皆に愛国心があって自分の国だと思ふから、戦争も行うのでしょうか。仏教とは仏様の教え、仏法とも言います。仏法は真理を表しています。皆が繋がった命ですよと説いています。根っこは皆が等しく救われていく事を説いています。

地球が大きな家族として考えたら分かります。皆繋がった命なのだから、仲良くしていきましょう。死んだ後まで通じているのが、仏様の教えです。

昔から語り継がれている歌を一首

人の車 作る大工は意けれども 己が作りて 己が乗りゆく

私達の苦しみは自分自身が原因なのに、周りのせいにして、自分の心の中に苦しみを作ってしまう。自分自身を振り返りましょう。自分が作った火の車に熱い熱いと乗ってもがいているのが私達です。立ち止まって振り返り、穏やかに生きていけたら、有り難い事ですね。

以上でお話が終わりました。引き込まれるように川柳と解釈を聞き、時間が早く過ぎました。楽しく、分かり易くお話して頂きました。また、続きが聞きたいと思います。

ありがとうございました。

(サービス付き高齢者向け住宅相談員：岡村 照代)

平成 30 年度第 4 回運営推進会議



日 時：平成 30 年 11 月 8 日 (木) 14:00~16:00

場 所：リバティかこがわ 2 階ホール

委 員：家族代表 4 名 地域代表他 4 名
行政 1 名 医師 1 名 施設 3 名 計 13 名

オブザーバー：家族・職員 10 名

議 題：①施設の行事報告

②ターミナル報告【ユニット型特養】

③介護について語ろう会 (月 1 回)【在宅における看取りを考える】

担当 ヘルパーステーション・デイサービス

④ひやりはっと事故報告 (9・10 月)

⑤実習生受入れ【大学生介護体験・中学生トライやる】

⑥身体拘束適正化委員会での内容検討

地域密着型特養 2 例・ユニット型特養 2 例・グループホーム なし

⑦意見交換【新聞記事を読んで意見交換】

次回 第 5 回 1 月 24 日 (木)

【年の瀬コンサート 2018のご案内】

◆ ヴァイオリン：村津 瑠紀 ◆ ピアノ：松盛 由佳 ◆

～ モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為にソナタ 変ロ長調 KV378
バーンスタイン：「ウエスト サイド ストーリー」より 他 ～

日 時：12月27日（木）午後2：00開演

場 所：リバティかこがわ2Fホール（加古川市野口町長砂95-2）

入場料：会員1,000円 非会員2,000円（当日会員登録できます）

高校生1,000円 中学生以下 無料

問合先：せいりょう園 TEL（079）421-7156



【せいりょう園陶芸教室 1日体験のご案内】

～ 3月3日桃の節句に手作りの“お雛様”を飾りませんか？～

日 時：1月20日（日）10：00～12：00（定員10名）

1月21日（月）10：00～12：00（定員10名）

料 金：2,500円

場 所：ユニット型特養横「アトリエ一番星」

講 師：喜多千景・中本万理恵

申込先：せいりょう園 TEL（079）421-7156



【せいりょう園空き情報（平成30年11月15日現在）】

●サービス付き高齢者向け住宅（バス・トイレ・キッチン・収納付き）

①自愛の家さくら：7室（19.1㎡：2室、24.7㎡：3室、25.8㎡：2室）

②リバティかこがわ：9室（33㎡：4室、35㎡：2室、39㎡：2室、41㎡：1室）

●ケアハウス：空きなし（バス・トイレ・キッチン付24㎡）

●グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし

[問 合 先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

[交通手段] JR神戸線加古川駅より、かこバスで12分長砂公民館前下車すぐ前。

[周辺環境] 徒歩圏内に、スーパー・コンビニ・パン屋・弁当屋・スポーツ施設・
内科・歯科などがあります。



【せいりょう園キッズクラブ（冬休み）のご案内】

日 時：12/24（月）～1/5（土）の8時～17時 ※12/30～1/3は休み

利用料金：1日1,000円（半日利用の場合は500円）

※今年度初回の方のみ保険料（800円）がかかります。

場 所：リバティかこがわ2F（加古川市野口町長砂95-2）

利用方法：予約制（定員20名）※別途申込書があります

申 込 先：せいりょう園 TEL（079）421-7156

